

S10a

## 電波強度の強い狭輝線1型セイファート銀河 RX J1633+4718 のすざく、 かなた、VLBIによる多波長準同時観測 (2)

高橋宏明、林田清、穴吹直久(大阪大学)、秋田谷洋、伊藤亮介(広島大学)、藤沢健太、新沼浩太郎、杉山孝一郎(山口大学)、米倉覚則(茨城大学)、土居明広(宇宙研)

RX J1633+4718( $z = 0.116$ )は可視光分光で狭輝線1型セイファート銀河(NLS1)と呼ばれる種族に属する活動銀河核である。この天体はNLS1では稀なRadio Loudなグループに属する。我々は2011年2012年にこの天体をX線天文衛星すざくで観測し、2012年にはかなた望遠鏡、VLBIを用いて多波長準同時観測を初めて行い、その結果を報告した(2012年春季年会 S09a、2012年秋季年会 S07a)。

かなたの近赤外・可視光の測光観測ではRX J1633+4718と4''離れたスターバースト銀河両者の母銀河成分を差し引いて、中心核成分のみを考慮した。軟X線領域の観測結果と総合すると、近赤外から軟X線にかけてのスペクトルは、ブラックホール近傍にある降着円盤から出ている多温度黒体放射モデル( $kT_{\text{in}} \sim 60 \text{ eV}$ ,  $R_{\text{in}} \sim 1 R_{\text{g}}$ )と温度 $kT = 1 \text{ eV}$ の単一黒体放射モデルの足し合わせで説明できる。一方、2 keV以上のX線スペクトルは $\Gamma \sim 1.3$ と5 keV程度のカットオフエネルギーを持ったべき関数型モデルで再現できる(2012年春季年会 S09a)。コロナ起源の逆コンプトン散乱と考えた場合、典型的な1型セイファート銀河よりもコンプトン冷却が効き、コロナの温度が下がっている極端な例と考えられる。

本発表では、電波からX線までの多波長スペクトルの結果をまとめ、この天体の中心部の放射のメカニズムについて議論する。